

クールなパイロットはウブな新妻を
溢れる独占愛で身籠らせる

目次

クールなパイロットはウブな新妻を
溢れる独占愛で身籠らせる

5

番外編 待望の瞬間

279

クールなパイロットはウブな新妻を
溢れる独占愛で身籠らせる

プロローグ

「梢子、俺と結婚してほしい」

デートで訪れた、今治市内にある高層ホテルのレストラン。ディナーを楽しんだ後、宿泊するホテルの部屋で、突然千早さんこと藤川千早からプロポーズされた。

思いがけない言葉に、私は聞き間違いないかとおうむ返しで千早さんに確認する。

「あの……、千早さん、今、『結婚してほしい』って言いました？」

千早さんは、付き合い始めてまだ数カ月の彼で、大手航空会社の操縦士をしている。三十三歳の若さで飛行機の操縦桿そうじゅうかんを握る彼は、女性たちの憧れの的だ。

スベックだけではなく、見た目もモデルや俳優みたいに格好よく、操縦士の制服を脱いでも女性たちの視線を釘付けにしている。

そんな彼からのプロポーズに、私は嬉しくて舞い上がりそうになるのを必死で堪えた。

千早さんは私の問いに頷いて、改めて私に向き合くと、ポケットの中から小さな箱を取り出した。

「俺は、毎日どこかの空を飛び回っているし、すぐに連絡を取れる環境にない。加えて遠距離恋愛だ。いつも梢子に不安を抱かせてしまっているのは重々承知しているけれど、その不安を解消した

いのは俺も同じなんだ。だから……、花澤梢子さん。俺と、結婚してください」

その言葉を聞いた途端、私の視界はじわじわとぼやけ始めた。そして頬には、涙が伝う。

嘘みたいだ。千早さんからの告白で交際が始まっただけでも信じられないくらいだったのに、まさか、プロポーズまでしてくれるなんて。

私、もしかして明日死んじゃうの……？

感極まって返事ができない私の顔を、千早さんが心配そうに覗き込む。

「梢子……？」

「……ます。千早さんと結婚します」

涙でぐちゃぐちゃになった顔を見られなくなって、俯いたまま返事をする、千早さんが私を優しく抱きしめた。

「ありがとう、必ず幸せにする。二人で幸せになろう」

私は涙と鼻水のせいで息ができなくて、ただひたすら頷くだけだったけれど、こうして高層階からの夜景を見るたびに、きっと今日のことを思い出すだろう。

千早さんが気遣って、ベッドサイドにあるティッシュを取ってくれたので、私は涙を拭い、改めてお互いの顔を見つめ合う。

「恥ずかしいから見ないでください。化粧が取れてる……」

「結婚したら、もっといろんな梢子の顔を見ることになるんだから。それに、化粧が取れた顔も素敵だよ」

千早さんはそう言う、箱を開けて、中から指輪を取り出した。

部屋の間接照明に照らされて、ダイヤモンドがキラキラと光っている。

遠くに来島海峡くしまい海峡が見えるこの部屋からは、橋の塔頂部分と塔の真ん中辺りの高さに美しい光が見える。航空法で定められている航空障害灯というものらしく、地表又は水面から六十メートル以上の高さの物件に設置しなければならないのだそうだ。

上空を通過する飛行機などに橋の存在を示し注意喚起することで航行の安全を守っているのだと、昼間に千早さんから教わった。塔頂部分はピカピカと点滅していて、都会の夜景には敵わないけれど、そのフラッシュにも負けない輝きに、私は目を奪われる。

千早さんが私の左手を取って薬指にそっと指輪をはめると、金属特有のひんやりとした感覚は、すぐに肌の温度に馴染んだ。

「まずは、最高に色っぽい梢子が見たい」

そう言う千早さんは私を抱きかかえると、ベッドの上にそっと下ろす。

「梢子、愛してる」

耳元で囁く声に、私は何度も頷いた。

「私も、千早さんのことを愛してます——」

深い口づけから、身体と心が繋がっていく。

二人で甘く蕩ける甘美な時間がこれからずっと続いていく。千早さんは優しく、時に激しく私の身体を求め、私もそれに応えようと必死でしがみついた。

第一章 出合い

十月某日、日曜日。時刻はもうすぐ十八時三十分を指そうとしていた。

私は今、空の上にいる。

正確に言えば、高校時代から仲が良かった友人の結婚式に参列し、帰宅の途につくため羽田発松山行きの飛行機に乗っているのだ。

エアラインジャパン、通称ALJは日本の三大航空会社のひとつで、羽田空港を拠点としたほぼ全国の空港に就航している航空会社だ。

今日の関東地方は、朝から曇り空で昼から雨がぱらついていた。

横浜で行われる友人の結婚式のために、金曜日の最終便で東京へやってきた。土曜日は早朝にホテル周辺を観光し、午後からは結婚式、披露宴が執り行われた。そして今日は、朝から横浜市内の観光を満喫していたのだけど、ひとつだけ気がかりなことがあった。

明日の仕事に備えて夕方の便を予約していたけれど、上京する前から発生し、日本列島を目掛けて北上する台風二十一号の動向だ。

上京前は、ちょうど沖縄地方に上陸との情報で、私が松山へ戻る頃にちょうど台風の影響を受けるのではという不安もあった。

それが見事に的中し、台風二十一号は松山行き of 航路を遮るかのように、本州を覆っているとアナウンスが流れている。

搭乗前も台風の動向が気になり、テレビでも夕方辺りから空だけではなく陸路にも影響を及ぼすのではとの報道に、今日中に松山へ帰ることが出来るのか内心ヒヤヒヤしていた。

台風接近のため、通常の航路とは違うルートで飛行しているとアナウンスされていたけれど、やはり強風の影響で、機体は行きの飛行機に比べて揺れもある。この先も激しい揺れが予想されることだった。

機長のアナウンスが終わっても、シートベルト着用サインが解除されることはない。トイレに行く時以外はずっとこのままなんだろうと諦めた私は、機内に持ち込んだ手荷物の中から雑誌を取り出した。

機内での暇つぶしになればと、東京へ旅立つ前日にコンビニで購入したローカル版のタウン情報誌には、私が勤務する洋菓子店『シェ・フルール』のスイーツが取り上げられている。

今月号に、ハロウィン期間限定スイーツが掲載されているのだ。

ハロウィン特集が組まれた今月号は、様々なお店のハロウィン限定商品や、愛媛県内のハロウィンイベントの情報がたくさん掲載されていて、目を楽しませてくれる。

パラパラとページを捲ると、お店の期間限定パンプキンパイのページが目飛び込んできた。

地元の契約農家さんから仕入れた野菜で作るパンプキンパイやスイートポテトは、毎年好評で、どれも売り切れ続出の人気商品だ。

松山市内にあるほかのお店も同じページに掲載されており、時間的にお腹が空いている私は、無性にケーキが食べたくなった。松山に到着したら、帰りにどこか寄ってみようかな。

ページを捲っていると、強風に煽られたのか、突然機体が大きく右に傾いた。

その拍子に、隣に座る親子——おそらく未就学児であろう女の子が驚いて「ママー！」と、私の反対側の席に座る女性に泣きながらしがみついた。

女の子の母親は、娘を安心させようと女の子に声を掛けているけれど、座席のあちらこちらから、同じように搭乗している小さな子たちが悲鳴を上げている。

乗務員たちも、動揺する乗客全員の対応は難しいようで、一向にこちらへやってくる気配はない。母親は周囲の目を気にして、必死になって子どもをなだめているけれど、機体は乱気流に突入しているため、なかなか揺れは治まらない。

私は手にしていた雑誌を座席前のポケットに差し込むと、自分のバッグの中から、ある物を取り出した。それは、姪の桜子と遊んでいた時に、彼女が間違えて私のバッグの中に入れてしまったシール帳だ。その裏にはひらがなで『しのぎさくらこ』と書いてある、彼女のお気に入りだ。

東京へ行く前日、姉たちが実家へ遊びに来た時、桜子が姉のものと間違えて私のバッグの中に入れてしまったらしく、飛行機の中にいる時に姉から連絡があったのだ。

私は旅行用の別のバッグに貴重品を移し替えることをせず、普段使いのバッグをそのまま持って来てしまった。ここで桜子の宝物をなくしてしまったら大変だ。今度の休日、東京土産を渡すのと一緒にシール帳を返しに行かなければと思っていたけれど……

私は、そのシール帳を取り出すと、その親子にそれを差し出した。

「これ、よかったらお貸ししますよ。姪のものなので、後で返していただきたいんですけど……」私の言葉に、女の子が反応した。

「シールちゃん……？」

「うん、お姉ちゃんの姪っ子ちゃんのものなんだ。これ、知ってる？ 人気あるんだよね？」

そう言っ、シール帳のボタンを外し、中のシールを見せた。

桜子の家の近所に住む年の近い子が通う幼稚園では、シール集めが流行っているらしい。

私も幼少時代、姉とシール帳のコレクションをしていたことを思い出す。

桜子から「しようちゃんもシールあつめてこうかんしよう」とお誘いを受け、購入を悩んでいたところだ。

桜子のシール帳には、小児科の通院時にご褒美でもらうテレビアニメのシールに始まり、スパーやドラッグストアで販売している大きなラインストーンのキラキラしたシール、お人形の形のシールなどがたくさん貼られている。

お友達とシール交換をしているとも聞いているので、シール帳から剥がれないよう、目が離せない。

ざっと見る限り、シールの粘着部分はしっかりしているので、突然ポロッと剥がれたりはいしないうだ。

私はシール帳を女の子に手渡すと、女の子は泣き止んだ。

「すみません、ありがとうございます。娘もシールを集めているので、助かります」

奥側に座る母親が、私に声を掛け、二人でシール帳と一緒に見てくれた。

よかった、これで少しは恐怖心が削がれたかな……

女の子の名前はみゆきちゃんといい、みゆきちゃんはシール帳を捲っては「これとおなじシールもってる」「これかわいい」などと口にして、終始目を輝かせている。

みゆきちゃんの母親も、一緒にシール帳を覗き込んで、「今度、これ見つけたら買おうか」などと話をしていた。

飛行機は相変わらず小刻みに揺れている。けれど、先ほどのように大きな衝撃はなく、少し安定してきたようだ。

しばらくして機内アナウンスが流れ、強風のエリアから抜け出したことが知らされた。

アナウンスの後、機内に搭乗している客室乗務員が座席に飲料を配りにやって来た。飲み物を受け取る際、みゆきちゃんに「さつきはすぐに来られなくてごめんね」と、ぬりえセットを手渡した。みゆきちゃんは一瞬何が起こったのかわからず固まっていたけれど、ぬりえセットを見て嬉しそうな表情を浮かべている。

私たちはお茶をもらい、みゆきちゃんがぬりえを使って早速遊んでいるのを眺めていた。

操縦室からのアナウンスが流れた後は機体が揺れることはなく、快適な空の旅が楽しめたけれど、念のためシートベルトサインは着陸まで点灯したままだった。

松山への到着予定時刻は、定刻だと十八時二十分を予定していたけれど、乱気流の影響で十八時

五十分——当初より三十分ほど遅れると再度アナウンスが流れた。

機内は多少ざわついたけれど、混乱はない。

ブーイングのざわつきではなく、定刻時間より多少遅れても、無事に目的地へ到着することへの安堵のざわめきだった。

この悪天候の中、飛んでくれただけでもありがたい。近隣の空港へ緊急着陸、下手すれば飛行不能で羽田に逆戻りする可能性すらあったのだから、通常の航路を変更しても飛行を判断してくれた航空関係者には感謝しかない。

そして案の定、松山から折り返して運行予定だった東京行き最終便が、悪天候の影響で欠航が決まったと知るのは、松山空港に到着を知らせるアナウンス時だった。

飛行機の高度がだんだんと下がってきて、着陸態勢に入った。窓はシェードが下ろされて外の景色は見えないけれど、正面の大画面には、操縦席から見える滑走路の様子が映し出されていた。それに気付いた私は、画面を食い入るように見つめていた。

着陸はとて丁寧で、車輪が滑走路に着地した瞬間の衝撃は思っていたよりも少なく、それまでのひどい揺れだった飛行に比べればとても安心できるものだった。

飛行機がブレーキをかけながら滑走路を減速する。

操縦席は視界を遮るものがないだけに、さっきの悪天候の中の操縦も大変だっただろうな……そう思っていると、機内アナウンスが聞こえた。

『今日は、エアラインジャパン685便、羽田発松山行きにご搭乗いただき、誠にありがとうございます』

います。機長の藤川です。途中、台風二十一号による乱気流の影響で、皆さまにご心配をおかけいたしましたことをお詫び申し上げます。当機は定刻より三十分遅れましたが、無事に目的地である松山へ到着しましたことを、ご報告いたします』

飛行機が無事に松山へ到着したことで、機内の乗客は棚上に載せていた荷物を下ろしたり、シートベルトを外して通路に並んだり、みんな飛行機から降りる準備に余念がない。

機長アナウンスは、乗客のざわめきに掻き消されてところどころ聞き取りづらかったけれど、事故もなく無事に松山へ戻ってこれたことをようやく実感できた。

私はみゆきちゃんからシール帳を返してもらうと、バッグの中へしまい、席を立つ。

続いてみゆきちゃん親子が席を立ち、私の後ろに続いた。

飛行機の出口で、客室乗務員さんが乗客を一人ひとりお見送りしている姿が見えた。私もお世話になったお礼を伝えようと口を開いたその時だった。

「お客さま、先ほどは隣の座席のお客さまのご対応、ありがとうございます」

客室乗務員の一人に声をかけられ、お礼が書かれたカードを手渡された。その乗務員の胸元には名札があり、^{きくろ}桜田と読めた。

手渡されたカードは空を飛ぶ飛行機の図案で、そこにはお礼とともに、この便名と客室乗務員一同と書かれている。

こんなこと、飛行機に乗って初めてのことだ。時々こうしたメッセージのサプライズがあることをSNSなどで知ってはいたけれど、まさかそれを自分が体験することになるとは思ってもみな

かった。驚いた私は、お礼を伝えるどころか何も言えず、会釈をして飛行機を降りた。

ボーディングブリッジを渡って手荷物受取所へと向かった私は、まだ荷物は出てこないだろうと、先にトイレを済ませることにした。

トイレの後、洗面台で手を洗い、バッグの中からハンカチを取り出した。

ああ、飛行機の到着が遅れたこと、連絡してないや。

家に帰っても、両親は仕事に出ていて誰もいないけれど、連絡だけは入れておこう。

私はトイレを出ると、邪魔にならない場所でバッグの中からスマホを取り出そうとしてふと気付いた。

——あれ？ 家の鍵がない。

いつもだと、家の鍵と車の鍵を一緒にくっつけていて、バッグの中でその存在感があるからすぐに気が付くけれど、今回は空港まで電車やバスを利用したため、車を使わないから鍵を別々にしていたのだ。

車の鍵は家に置いてきたからいいとして、家の鍵がないと、大変なことになる。

いったいどこに落とした……？

私はその場にしゃがみ込むと、バッグの中を一つひとつ探していく。バッグの内ポケットやポーチの中、ありとあらゆるところを見るけれど、それらしきものは見つからない。

もしかして、飛行機の中で落とした……？

思い当たるのは、みゆきちゃんにシール帳を貸してあげようとバッグを触った時だ。

あの時機体も揺れていたし、もし仮にあの時鍵を落としていたとしても、気付かない可能性は高い。

私は近くにいた空港職員に事情を説明して飛行機へ戻る許可をもらうと、急いで先ほど通った通路を逆戻りし、ボーディングブリッジを渡って飛行機の中へ駆け込もうとしたところ、飛行機の入口で再び客室乗務員に声を掛けられた。事情を説明すると、その客室乗務員は座席を確認してくると言つてその場を離れる。私はハッチの入口で彼女が戻ってくるのを待っていた。

すると……

「ああ、先ほどのお客さまですね」

飛行機の奥から桜田さんが、私のほうへ近付いてくる。

彼女の手には、一本の鍵と私が座席ポケットに差し込んだ雑誌があった。

「鍵は、座席下に落ちておりました。こちらでお間違いないですか？ それからこちらの雑誌も一緒にお願いします」

そういえば、雑誌も座席ポケットに差し込んだままだった。

「ああ、これです！ よかったあ……。これがないと、家に帰っても入れないところでした。重ねねご迷惑をお掛けしてすみません、本当にありがとうございます！」

私は雑誌と鍵を受け取ると、今度こそ失くさないよう鍵をポーチの中にしまい、バッグの中に入れた。

「よかったらこれ、どうぞ。地方のタウン情報誌なのでつまらないかもですけど……」

そう言つて、私は一旦受け取った雑誌を桜田さんに差し出した。

「え、いただいてもいいんですか？ 嬉しい。私たち、乗務でよく地方へ行くんですけど、食べ歩きとか楽しんでいて、こういうタウン情報誌ですごくありがたいです」

意外にも桜田さんが喜んでくれたので、私は自分が勤務するお店の宣伝をした。

「実はハロウィン特集で、私が勤務するお店のスーツがこれに掲載されているんです。もしお立ち寄りがあれば、よろしく願いますね」

そう言つて、お店の写真が掲載されているページを開いて宣伝すると、桜田さんが「素敵！」と、感嘆の声を上げる。

「そうなんです！ それはぜひ、お店に立ち寄らせてくださいね」

社交辞令的な会話が済み、私は再び飛行機の外に出ようと身体の変えようと、飛行機前方の扉が開いた。目の前に、テレビなどでよく見る操縦士の制服を着用した男性が二名、出てきた。

先頭に立つ男性は、背の高い、顔立ちの整ったいわゆるイケメンだ。

そういえば副操縦士との見分け方は、制服の袖口のラインの本数だと聞いたことがある。

目の前にいるイケメンは、袖口に四本ラインが入ったジャケットを着用していた。

この人が、この飛行機を操縦していたんだ……

パイロットになるのって、かなり難しいって聞いたことがある。

身体的な検査も、一般的な健康診断よりも条件が厳しいとか何とかテレビで放送していたような思わずまじまじと見つめてしまいそうになるところをグッと堪えた。

でも本当にイケメンだなあ……

私、車の運転はできるけど、車と飛行機では次元が違いすぎるもんなあ……

私は尊敬の念を抱きながら彼に会釈して再びボーディングブリッジを渡ると、手荷物受取所へ向かった。

手荷物受取所では、飛行機から降ろされた荷物がターンテーブルの上に載せられて、ゆっくりと回っている。

乗客が一人、また一人と自分の荷物を手に取り、到着ロビーへと向かっていく。

私はターンテーブルの荷物に目を向けた。

私の荷物は、オレンジ色のスーツケースだ。ビタミンカラーのそれは、高校時代に修学旅行へ行くために購入したもので、こうして使うのも実は今回で二回目だ。

ほかの人の荷物は割と地味な色の鞆が多いので、オレンジ色のスーツケースはよく目立つ。

ターンテーブルの上の荷物は一周目ではなくなり、最後のほうに出てきた私のスーツケースがその存在感を放っている。

スーツケースを手にとると、ちょうど先ほどの乗務員たちが通路を通って手荷物受取所に現れた。私は一瞬そちらに視線が向いたけれど、早く家に帰ろうと到着ロビーへ向かおうとしたその時だった。

「あの、先ほどありがとうございました」

背後から、みゆきちゃんのお母さんが私に声を掛けた。

みゆきちゃんは長旅で疲れたのか、お母さんに抱っこされている。

お母さんの荷物に目をやると、私のスーツケースよりも少し大きなスーツケースが一つと、ここに買い物で使うエコバッグがいくつか括りつけられている。

「いえいえ、そんなお気になさらずです。それより、荷物は大丈夫ですか？ 空港からはどうやってお帰りですか？」

「JR 松山駅行きのリムジンバスに乗るつもりなんです。JR で帰る予定なんですけど……」

お母さんはそう言うけれど、みゆきちゃんを抱っこした状態で荷物を運ぶのは大変そうだ。

「じゃあ、よろしければバス停まで一緒にしますよ。荷物、私が運びますので、そのままみゆきちゃんを抱っこしてあげてください」

私も休日には桜子とよく遊ぶので、小さい子がこうして途中で電池が切れたように、突然動かなくなることは想定内だ。

私の声に、みゆきちゃんのお母さんは驚いた表情を浮かべるも、きつとバスの時間が迫っていたのだらう。「じゃあ、お願いします」と、素直に私の提案を受け入れてくれた。

私たちはそのまま到着ロビーから、バス停へと向かう。

松山も雨が降っていたのか、路面が濡れている。

バス停には、みゆきちゃんたちが乗る予定のリムジンバスがちょうど到着したところだった。

バスの昇降口まで一緒に歩いていくと、バスの乗務員さんが荷物をバスのトランクに載せると言うので、預かっていた荷物を乗務員さんに託すと、改めてお母さんからお礼の言葉を告げられた。

「本当に、何から何までお世話になりました。ありがとうございます」

抱っこされているみゆきちゃんは、眠ってしまったようだ。

「いえいえ、そんな。大したことじゃないので気になさらないでください。それじゃ、お気を付けて」

私は二人を乗せたバスが発車するのを見送ると、今度は路線バス乗り場へと移動する。

自宅への交通機関は、道後温泉方面へのバスが乗り換えなしで最短距離だ。けれど、時刻表を見るとバスの発車時刻は今から二十分後で、まだバスも到着していない。

それまで何して時間を潰そうかな。

今は十九時二十分、飛行機の到着が遅れたことに加え、乗る予定だったバスも一本ずらさなければならぬ。

時間を潰そうにも、タウン情報誌はさつき桜田さんにあげてしまったし、空港内の飲食店もそろそろ閉店する時間だろうし……

ロビー内にあるお土産屋さんも、閉店しているところが多い。

こんな大荷物を抱えて移動するのは面倒だ。ロビーにある椅子に腰を下ろして時間までスマホでも見てみようかな。

そう思っていたところに、先ほどの飛行機の乗務員たちが数台に分かれてタクシーに乗り込む姿が目に入った。

タクシーもなあ……

お財布に余裕があれば、市内電車の乗り場がある辺りまでタクシーを使ってもいいんだけど、今月は友人の結婚式でいろいろと出費が重なり、それどころではない。

私はスーツケースを引きながら再び空港のロビーへと向かい、時間までロビー内の椅子に腰を下ろして時間を潰すことにした。

路線バスが空港にやってくると、私は荷物が邪魔にならないよう後部座席へ座り、最寄りのバス停まで車窓の景色を眺めていた。

ぼんやりしていると、すっかり最寄りのバス停を通り過ぎてしまい、道後温泉駅前までやってきてしまった。私は出口でバス代を支払うと、バスを降りて商店街入口を仰いだ。

どうしようかな……、市内電車に乗って家に帰ろうか。

けれど道後商店街の中に、母が切り盛りする小料理店がある。上京する時に、母からお店の常連さんへお土産を買って帰るように言われていて、それを届けに行くのもアリかな。一度家に帰って荷物を置いてからと想っていたけれど、帰宅してしまうと、多分家を出るのが億劫になりそうだな。私は一度深呼吸をして、スーツケースを片手に道後商店街のアーケードをくぐった。

ここ数年、インバウンド観光の影響で、この道後商店街も外国人観光客の人数がグッと増えた。私の目の前を歩いているのも、明らかに外国人観光客だ。ガイドブックを片手に、目当てのお店を探しているようだ。私は邪魔にならないよう、道の端を歩く。

商店街を歩いていると右側に横道があり、そこを入れて少し歩くと、母のお店『小料理屋みき』

がある。商店街の中にあるとはいえ、アーケード街から少し外れた場所になるので、滅多に観光客はやってこない。なので、よっぽどことがない限り、常連さんしか訪れることはない。

アスファルトで舗装こそされているけれど、アーケードみたいに綺麗な舗装ではない。加えて路面が雨で濡れている。私はスーツケースの持ち手部分を元の位置に戻すと、スーツケースを持ち上げて店の入口へ向かった。

『小料理屋みき』の看板は、通路の邪魔になるから出していない。

店の前に到着すると、暖簾が入口に掛けられている。暖簾には敢えて店の名前は書かれておらず、タウン情報誌やメディアなどの取材も一切断っているため、常連客以外の人が迷い込むことは滅多にない。かといって一見客お断りの店でもなく、ただ単に母が一人で切り盛りするお店だから、一人で捌ける人数のお客さんが来てくれたらそれでいいというスタンスだ。

なので、知る人ぞ知る母のお店は、地元の商店街で店を営む人や常連さんたちに支えられていると言っても過言ではない。

今日は日曜日だから、そんなにお客さんもないだろう。

私は古い引き戸をガラガラと開けた。

店の奥から、母の「いらつしゃい」という声が聞こえる。

カウンター席と小さな小上がりの座敷では、私が小さい頃からの常連さんたちが、母の手料理をつまみに酒を飲みながら、壁面にあるテレビでプロ野球の試合を観ている。

「ただいま」

私がカウンター奥の調理場に声を掛けると、店のお客さんが口々に「おお、梢子ちゃん。お帰り」「結婚式、どうだった？」などと声を掛けてくれる。

お客さんたちの反応に気付いた母が、料理の手を止めて、カウンターへやって来た。

「ああ、お帰りなさい。……って、空港からそのまま来たん？」

と、私の荷物を見て目を丸くする。

「うん、うつかりバスを乗り過して道後まで来たけん、ついにて寄ってみたんよ」

私の言葉に、母は呆れている。

「そうなん？ 乗り過したって……」

母の反応とは真逆で、常連さんたちは私の心配をしてくれる。

「でも梢子ちゃん、よう無事に戻ってこれたのう。こっちは昨日から大雨暴風警報が出て、大事やったんよ。おかげで商売あがったりやわ」

そう言うのは、道後商店街でお土産屋さんを営む三沢さんだ。

還暦を過ぎて、髪の毛もシルバーグレーのダンディなおじさんだ。

「そうそう、そのせいで昨日と今日は観光客がいつもより少なくて、うちも日中暇やったんよ」

三沢さんに続いて口を開くのは、同じく道後商店街でカフェを経営する武田さんだ。カフェは奥さんと二人で切り盛りしており、学生の頃、私もバイトでお世話になった。

「へえ、そうだったんだ……。帰りの便は台風の影響で機体が結構揺れたし、到着も定刻より三十分遅れたんですよ」

私はそう言いながら、カウンター席の空いたところに腰を下ろす。母がグラスに水を入れて、テーブルの上に置いた。

「それでこの時間なんやね。ごはんは？ もう食べた？」

母の問いに、出された水を一気に飲み干して返事をする。

「まだ、めっちゃお腹空いた。すぐにできるものある？」

私の返事を聞いた三沢さんが、器を手にとちらへ近付いてきた。

「あれ、梢子ちゃんごはんまだやったんか。これ、まだ箸つけてないけん、食べるか？」

そう言うて私の前に差し出されたのは、蓮根のはさみ揚げだ。

「三沢さん、さすがにそれは……。お気持ちは嬉しいけど、三沢さんがお金を払って注文したものを、私が食べるわけにはいかないです」

私が固辞すると、武田さんが枝豆の入った器を私の目の前に差し出した。

「美樹ちゃん、俺の枝豆、梢子ちゃんに渡すけん、新しいの出して。とりあえず梢子ちゃん、これ食べとき」

武田さんの声に、母が返事する。

「ああ、武田さん、ごめんねえ。梢子、こっち入って自分の分、何か適当に作る？ お母さん今、手が離せんのよ」

きっと今、コンロの火が点いたままなのだろう。母が一人で切り盛りするお店だから、一度にたくさんの方ができないのはみんな承知の上だ。

「食材、勝手に使っていい？ 忙しいなら手伝おうか？」

私の返事に母は「お願い」と言って、手伝わせる気満々だ。私は長旅で疲れている身体に鞭を打ちながら、そのままカウンターから奥の調理場へと移動した。

冷蔵庫を開けると、それなりに食材が揃っている。母にオーダーが入っているものを聞くと、ほとんどが揚げ物と刺身だった。

包丁の扱いに自信のない私は、うまく魚を捌くことができない。なので、そちらを母に任せて私は揚げ物を担当することにした。

豚カツを作るため、肉の筋切りをして下味をつけた後に衣をつける。ほかにもクロツケのオーダーが入っているそうで、じやがいもの皮が剥かれたままになっていたので、その続きをした。ポテトサラダも一緒に作ろうと、少し多めにじやがいもの皮を剥く。

じやがいものが茹であがるまでに、先に豚カツを油で揚げた。

豚カツが綺麗に揚がると、母がキャベツの千切りを盛り付けた器を用意してくれているので、そこに包丁で適度な大きさに切った豚カツを置き、カウンターへ運んだ。

「豚カツ揚がりましたよー」

私の声に反応したのは、近所の旅館に勤務する山中さんだ。勤務を終えて、帰宅前に立ち寄ったのだらう。

「梢子ちゃん、ありがとう。梢子ちゃんが揚げてくれた豚カツ、嬉しいな」

山中さんは嬉しそうに器を受け取ると、割り箸で豚カツをひと切れ口に運ぶ。

「うまい！ 梢子ちゃん、俺の嫁にならんかい？」

山中さんの軽口に、みんなが「こいつはやめとけ、甲斐性ないぞ」と口々に言い、いじられた山中さんが「みんな、やめてや」と答えるのが一連のお約束だ。

私はお酒が入った飲んだくれは適当にあしらって、再び奥へ戻る。

ちょうど母が鯛を捌いて刺身を皿に盛り付けたところだ。私はその鯛の刺身を少しもらうと冷蔵庫の中から大葉と卵を取り出す。茶碗によそったごはんに具材を盛り付け、白だしや調味料を合わせたつゆをかけた。

宇和島鯛めしの完成だ。

鯛めしには、鯛を一尾丸々炊飯器で白米と一緒に炊き上げるものと、宇和島鯛めしのように刺身をごはんの上に乗つけて丼状態で食べるものと二種類ある。

松山では前者が主で、後者のほうは、それと区別するため敢えて『宇和島鯛めし』と地名をつけて呼ばれている。

後のことは母に任せ、私は自分の夕飯を手につと、再びカウンター席へ戻った。

三沢さんが「今日は宇和島鯛めしか」と、私の手元を覗き込む。

外食は大概洋食が多いので、それが続くとしても和食——とりわけ刺身が食べたくなる。

いただきますと手を合わせ、茶碗に盛られた鯛の切り身を一枚、箸で掴む。捌いたばかりの魚だから、とても新鮮だ。

じつくりと味わいながら、宇和島鯛めしをお腹いっぱい食べると、お土産を配っていなかったこ

とをようやく思い出した。

「あ、そうだ。みんなにお土産があるんです」

私はスーツケースの中から購入したお土産を取り出すと、包装を解いた。

お土産に何を購入すればいいか、出発前から悩んでいたけれど、母から空港で目についたものを適当に買ってきてと言われたので、それに従った。

購入したのはバナナのお菓子とお煎餅だ。

みんなの好みがわからないので、有名どころをチョイスしてみたのだけど、この場にいる三沢さんたちは大喜びだ。

「おお、ありがとう。気を遣わせてすまんなあ」

武田さんが代表して私にお礼を告げた。

「いやいや、全然ですよ。お好きなのをどうぞ」

そう言っ、箱に入ったお菓子をみんなの前に差し出した。

みんなでお菓子をつまみながらお土産話に花を咲かせている時だった。

店の引き戸が開き、一人の男性が顔を覗かせた。

身長が高く、細身でもしっかりと鍛えられた肉体なのは服を着用していても見て取れる。加えて顔もイケメンだ。

待って、この人……

口を開いていいものか悩んでいると、奥から母が「いらっしやいませ、空いてるお席にどうぞ」

と声を掛ける。

私は席を空けようと、先ほど食べ終えた鯛めしの空いた器をカウンターから片付けるため立ち上がった。

「ああ、どうぞそのまま」

男性は、私がこの店の客と思ったのだろう。席を立たなくていいと促してくれるけれど、そうもいかない。私が席を移動しないと、小さなお店なのでカウンター席はいっぱいになる。

「いえいえ、どうぞ。私は食事が済みしたので」

男性に席を譲り、私はカウンターの中に入っていく。男性は客が勝手にカウンターの中に入っていくと思っ、不思議そうに私の姿を目で追っている。

「お母さん、ごちそうさま」

私はそう言っ、器を洗うと、ちょうどじゃがいもが茹で上がったところらしく、衣をつけるところまで任されることになった。

その前に、今来られたお客さん——私が乗っていた飛行機の操縦士さんにお水を出さなきゃと、おしぼりとお水を用意する。

トレイに載せてカウンターへ戻ると、私のことをマジマジと見つめる彼と視線が合った。

「あの、すみません。さっきまで私が食事していたので、そこ、拭きますね」

私はトレイをカウンターの隅に置くと、布巾でテーブルを拭いた。彼はそんな私を見つめている。視線が辛い……、こんなことならきちんと化粧直ししておけばよかったかも。

「あの……違っていたらすみません。先ほど、飛行機に乗っていらっしゃいましたか？」

テーブルを拭き終えて、布巾を洗おうとカウンター内に入った時だった。その男性が唐突に私に向かつて口を開く。

その声に、みんなが彼に注目した。

「おお、あなた、もしかして梢子ちゃんと同じ飛行機に乗ったんか？」

三沢さんがそう反応すると、私に質問の答えを促すよう、彼がじつと私を見つめている。

「あ……、はい。さっきの飛行機の操縦士さん、ですよね？」

私の声に、みんなが歓声を上げる。

「何？ あんたパイロットなん？」

「三沢さん、ちょっと失礼ですよ。……すみません、初対面の方に向かつていきなり」

「そうですよ、武田さんの仰るとおりですよ。ホント、すみません」

三沢さん、武田さん、山中さんの順に口を開く。

突然見知らぬ人たちから話しかけられて驚くかと思ったけれど、職業柄なのか、彼はとてもスムーズな対応を見せた。

「いえいえ、大丈夫ですよ。職業を明かすと、こういう反応をされるのはいつものことなので」
そう言つて、彼は自己紹介を始める。

「エアラインジャンパンで操縦士しております、藤川と言います。本当は今日、折り返し of 最終便の操縦をする予定だったんですけど、悪天候で欠航になったので、明日の始発便を担当します」

彼の言葉に、一同が「おおつ、本物のパイロット！ 初めて見た！」と歓声を上げる。

店内が藤川さんを囲んで盛り上がっているところに、母が先に出来上がった刺身の盛り合わせを持つてやつて来た。

「いらつしやいませ。……あら、こちらのお客さん、とってもイケメンさんやね」

母の声に、三沢さんが反応する。

「この人、パイロットなんやつて。しかも、梢子ちゃんに乗った飛行機の操縦しよったんと」
私が乗っていた飛行機の操縦をしていたんだと、伊予^{いよ}弁で母に話している三沢さんの顔を、藤川さんがじつと見つめている。

「え、そうなん？ この若いイケメンさん、実はすごいエリートなんやないん？」

奥の座敷からも野次馬の声が聞こえる。

そんな中、母が口を開いた。

「そうなんです、それは娘がお世話になりました。無事に松山まで娘を運んでくださってありがとうございます」

母がカウンターに盛り合わせのお皿を置いて、藤川さんに深々と頭を下げた。

そんな母に驚いたのか、藤川さんも立ち上がり、「いえいえ、こちらこそお嬢さんにご搭乗いただきありがとうございます」と頭を下げる。

そんな様子を常連さんたちが温かく見守っていた。

え、いったい何が起こっているの？ 状態だけど、すぐに藤川さんも席に腰を下ろしたので、そ

の場の空気はいつも通りに戻った。

「何か飲まれますか？」

カウンター越しに私が藤川さんに問い掛けると、藤川さんは「明日の朝が早いので」と言ってウーロン茶を注文した。そして、メニューを指差しながら、「肴は、何か日替わりのおすすめてもいただければ」と一品だけ頼んだ。

私はウーロン茶を用意しつつ、不思議に思い尋ねた。

「一品だけでよろしいですか？ せっかくなので、もう少しいかがですか？ 揚げ物や焼き魚など、おすすめてたくさんあるのですが……」

「今はちょっと控えているんです。もうすぐ会社の健康診断がありまして。それをクリアしないと乗務ができないので、現在調整中なんです」

藤川さんは、困ったように眉を下げて笑った。その表情に、みんなが魅了される。

私は注文の品を用意してテーブルに運ぶと、母の手伝いで奥に下がり、先ほどの揚げ物の準備に取り掛かる。裏に下がっていても、店は終始笑い声が絶えない。どうやら藤川さんは、常連さんたちと打ち解けているようだ。

コロッケに衣をつけ終えると、油の中にそっと入れる。ジュワツという心地よい音とともに、香ばしい匂いがふわりと立ちのぼる。

「コロッケってオーダーしたの誰？」

「それはなっちゃんたち」

「了解」

母が器に盛り付けたコロッケに千切りの野菜を添える。量的に二人前だ。私は茶碗を二つ用意して白米をよそうと、トレイにそれらを載せて、座敷席へと向かった。

「お待たせしました」

私が座敷の机の上にそれらを運ぶと、コロッケを注文したなっちゃんこと太田奈津子^{おおた なつこ}さんが割り箸を手にとった。

「梢子ちゃん、ありがとう。仕事が終わってから、家に帰ってごはん作るのって面倒くさくって、ついつい美樹ちゃんの店に入り浸ってしまっくんよね」

「うんうん、本当それ。お店がここにあって助かるわ」
そう言うのは、太田さんと同じ職場に勤める鈴木恵美子^{すずき えみこ}さんだ。

二人は私より少し年上で、道後温泉の近くにある旅館で仲居の仕事をしている。

道後温泉の本館周辺には、いくつもの旅館やホテルが立ち並んでいる。二人は最近、外国人観光客に簡単なガイドができるよう英会話を習い始めたと言っていたけれど、私も本当に英語の必要性を感じ始めた。

私の勤務する洋菓子店にも、たまに外国人観光客が訪れるけれど、みんな日本語が堪能だ。

学生時代、英語の成績が散々だった私は、日本語が達者な彼らに甘えているけれど、それではないかなと道後に来るたび実感する。

「ごゆっくりどうぞ」

私の言葉に、二人が笑顔で「ありがとう」と返事する。私がカウンター席に座る三沢さんたちへ視線をやると、お土産のお菓子が半分近く減っていたのに気付いた。さっきの座敷へ視線を向けると、太田さんたちにもお土産が配られていたようで、食べ終えたお菓子の包装紙が机の端に置かれている。

よかった、今日のお客さん全員に行き届いている。

私は三沢さんに声を掛けた。

「三沢さん、よかったら藤川さんにもお裾分けしてあげてください。…藤川さんも、羽田で購入したお菓子なんですけど、フライトの合間にでもよかったら召し上がってください」

私の声に、三沢さんが箱を手に取り藤川さんの前に差し出した。

「東京の人やし、食べ慣れとるものばっかりやろうけど、梢子ちゃんの気持ちやけん、受け取ってや」

三沢さんは方言丸出しで藤川さんに話し掛けている。少しお酒も入っているみたいだから、尚更だろう。

「空港で買ったものなので、藤川さんには馴染みのあるものばかりだと思いますが、よかったら…」

三沢さんの言葉と重複するけれど、極力標準語で藤川さんにも理解できるよう話す私に、藤川さんはとびきりの笑顔で答えてくれた。

「ありがとうございます。それじゃ、遠慮なくいただきます」

そう言っ、バナナ味のカステラのお菓子を手に取った。

健康診断前だと言っていたし、甘いものが苦手だと断られるかと思っていたけれど、受け取ってくれたことに安堵した。

「梢子ちゃん、この人、大の甘党なんです。今度ここに来る時、梢子ちゃんとお店のお菓子、用意しときや」

藤川さんは大の甘党なので、今度立ち寄る時に店のお菓子を用意するように。武田さんが方言でそう言う、藤川さんが驚いた表情を見せる。

「え、ここの看板娘さんじゃないの？」

藤川さんの言葉に、山中さんが反応する。

「そうなんよ、この通り、梢子ちゃんは見えた目も可愛いんやけど、めっちゃめっちゃええ子なんよ。梢子ちゃんがここで看板娘してくれたら毎日通うんやけど、普段は市内の洋菓子店に勤務して、ここに来るのは稀なんよ。ほやけん、実は超レアキャラ」

『ほやけん』とは伊予弁で『だから』の意味を示す。

山中さんの言葉に反応するのは武田さんだ。

「梢子ちゃんが学生の頃は、うちのカフェでバイトしてくれよったんやけどね、この通り見た目も可愛い器量良しやけん、梢子ちゃん目当てで通うおっさんが増えてね。おしやれなカフェを目指しよったはずが、気が付けば、むさくるしいおっさんの溜まり場よ」

武田さんが、私の学生時代のことを暴露する。確かに学生時代、私は武田さんの営むカフェでバ

イトをしていたけれど、その当時から、お店は武田さんの知り合いのおじさんたちの溜まり場だったはずだけどな……

面白おかしく話す武田さんのその言葉に、一同が爆笑する。

方言の一部が理解できていないのか、藤川さんが時々不思議そうな表情を浮かべている。それをわかりやすく藤川さんに説明するのだけど、自分のことを話すのは何だか照れ臭い。

「ここは普段、母が一人で切り盛りしている小料理屋で、私は用事で立ち寄った際、こうして店の手伝いをする程度なんです。今日は東京土産を持ってくるために、一度家に帰って荷物を置いてくはるはずが、うっかりバスを乗り過ごしちゃいまして……。大荷物そのまま店に來たんですけど、この通り、母は人使いが荒いのでこうして手伝ってるんです」

私の言葉で、藤川さんも大体の事情を理解したようだ。

「それはそうと藤川さん、せっかく道後に來られたことですし、もう温泉は浸かりましたか？」

私の問いに、藤川さんは首を横に振る。

「それが団体客の予約が入っていたのか、本館はこの時間いっぱいって言われちゃって……」

藤川さんの言葉に、武田さんが反応する。

「別館の飛鳥^{あすかの}乃湯^ゆは行かんかったん？」

「また今度、プライベートで來る時の楽しみにしようと思って、やめました。それに、ここの料理を食べたくなったので、絶対にまた來ます」

藤川さんの言葉に、みんなが歓声を上げる。

「そうなん！ なら次來る時までに健康診断終わらせて、今度是一緒に飲もうや」

お酒も入っていつもより陽氣になった山中さんが藤川さんに声を掛けると、藤川さんも嬉しそうに「ぜひ！」と返事する。

すっかり藤川さんもこの店の雰囲気^{ふんいき}に溶け込んでいる。

プライベートでの立ち寄りを約束してくれたけど、もしかしたらこの場の空氣を悪くしないための社交辞令かもしれない。私はカウンターの空いた器を下げて洗い物を済ませると、店内の壁時計に目をやった。

時刻はあつという間に二十一時半を回っていた。

やばい、早く帰って荷物をバラしてお風呂に入らなきゃ。

「お母さん、私、そろそろ帰るね」

母にその声を掛けてカウンターに戻ると、通路の邪魔にならないよう、隅に避けていたスーツケースを手を持つ。

「え、もう帰るん？」

私の帰り支度に氣付いた山中さんが声を上げたので、自然とみんなの視線が私に集まる。もちろん藤川さんの視線もだ。

「うん、もう二十一時半を回ったし、明日仕事やもん」

私の声に、藤川さんが「もうそんな時間か」と言っ席を立つ。

驚いたのは私だけではない。

「もつと一緒に話そうや」

ほろ酔いの三沢さんが藤川さんに声を掛けるも、武田さんがそれを制する。

「三沢さん、やめとき。藤川さん、明日の早朝便の飛行機を操縦するんやって言いよつたやろ？操縦士が操縦席で居眠りなんぞしよつたら大事になるやろ」

武田さんの言葉に、三沢さんも我に返る。

「そしたら、また絶対この店に来てや。俺ら、大概誰かがここにおるけん、来たらみんな集まるけん」

三沢さんの声に、奥の座敷に座る二人も同意の声を上げた。

「イケメンは目の保養やけん、お兄さんまた絶対来て！私らは旅館の仲居やけん仕事中は来られんけど、道後に泊まることがあったら、ぜひうちの旅館に泊まって」

そう言って太田さんが自分の勤務する旅館の名前を告げると、藤川さんが笑顔で「ぜひ！」と返事した。

その笑顔に魅了される太田さんと鈴木さんの表情は、お酒を飲んでいないはずなのに湧いて見える。

ああ、きつとこの人は天性の人たらしだ。

「僕も明日が早いので、そろそろ失礼します。また今度、必ず来ますので、その時はどうぞよろしくお願いします」

藤川さんはそう言うのと、さりげなく私の荷物を手に持った。

驚く私を、スマートにエスコートし続ける藤川さんの動きを一同が見つめている。

「それでは、みなさん、おやすみなさい。……商店街の出口まで一緒に行きましょうか」

引き戸を開けて私を外に出るよう促すので、私はそれに従うと、藤川さんはスーツケースを外に運び出すと引き戸を閉めた。

藤川さんは、路面が濡れているのに気付いて、スニーカーのキャスターが濡れないよう持ち手を持つと軽々と運んでくれる。加えて水溜まりに気をつけてと、私に注意を促してくれる。そんな態度や仕草に私の心はときめいた。

こんなふうに、男性から一人の女性として大事に扱ってもらうなんて、初めてのことだ。

学生時代にも彼氏はいたけれど、友達の延長みたいな付き合いで、こんなレディースファーストな扱いなんて受けたことはない。

しかも相手は、大手航空会社の操縦士。日頃私とは関わることもない、別世界にいるような人だ。それを意識すると、急に足元がおぼつかなくなり、何もないところで躓いて転びそうになる。それに気付いた藤川さんが、咄嗟に腕を伸ばして私の腕を掴む。

「大丈夫？」

心配そうに覗き込む藤川さんの表情に、私の心は撃ち抜かれた。

やばい、私、この人のこと好きになりそうだ……

そんな藤川さんの表情を、思わずマジマジと見つめている私に、藤川さんも驚いている。

「大丈夫？」

再び問い掛ける藤川さんの声に、ようやく私は我に返った。

「あ……、すみません、大丈夫です。それはそうと、荷物、ありがとうございます。重いのに持たせちゃってすみません」

「重いからこそ、こういうのは男の俺が持つんだよ」

そう言っ、商店街の入口……市内電車の駅がある方向へ向かって歩き始めた。

私はそんな藤川さんの隣を並んで歩く。

この時間は商店街の店も閉まっているせいか、人はまばらだ。

「今日は本当にありがとうございました」

藤川さんは、私の歩幅に合わせてゆっくり歩いてくれている。さりげない優しさに、ますます好感度が上がる。

「え？ 何が？ 俺、お礼を言われるようなこと、してないと思うけど……」

藤川さんはそう言うけれど、さりげなく相手のことを思いやれる行動を取る藤川さんは、まるで王子様のようなのだ。

「飛行機の操縦も、天気が悪い時って、全然視界が利かないですよ？ そんな中、こうして無事に目的地までみんなを運んでくださって本当にありがとうございます」

まさか飛行機の操縦のことに触れられると思っていなかったのだろう。藤川さんは驚いた表情を見せた。

「私、車の免許しか持ってないから、車以外運転したことないんですけど……。車は天気が悪かっ

たら電車やバス、ほかの公共交通機関などの替えがあるけど、飛行機って、替えが利かないから。本当に大変なお仕事だなんて思うんです」

そう言っ立ち止まると、改めて藤川さんに向かって深々と頭を下げた。

「だからこそ、こうして直接お礼が言えてよかったです。本当にありがとうございます」

頭を上げると、藤川さんが固まっている。

何で？ 私、何か変なこと言っった？

「あの……？」

私の問いに、藤川さんが我に返る。

「あ、ああ。すみません。自分が操縦する飛行機の乗客の人から、直接こうしてお礼を告げられる機会が減多にないので、驚いてしまっ……」

そう言っ、藤川さんは自分の手を口に当てた。ほんのりと耳元に紅が差したように赤くなっている。もしかして、照れている……？

「クルーたちは、飛行機に乗ったお客さまのお見送りを済ませた後、機内をチェックして飛行機を降りるんだけど。俺たち操縦士は、機内でその日の運航日誌をつけてそれをチェックしていると、お客様たちと顔を合わせる機会は減多になっ……」

ああ、それで飛行機の操縦士さんに会う機会がなかったんだ……
かつて、高校の修学旅行で飛行機に乗った時、客室乗務員さんたちのお見送りの記憶は残っていたけれど、操縦士さんの姿を見る機会はなかった。

「梢子さんは、市内の洋菓子店にお勤めってさつき聞いたんだけど……」

唐突に話題が変わり、私は内心ホッとした。

そろそろ話題のネタが尽きてきたところで、さつき常連さんたちが藤川さんにいろいろと根掘り葉掘り聞いていて、自分のことばかり話をさせられて嫌気が差していないか気になっていた。

「そうなんです。市内にある『シエ・フルール』って洋菓子店に勤務してます」

「え、シエ・フルールって……フランス語で花屋だよね？」

「はい。オーナーのご実家が花屋さんなので、そこから名付けたそうです」

「ああ、それで！」

名前の由来を聞いて納得したようだ。

「洋菓子店なら、休日はお休みとかないんじゃない？」

ふと、藤川さんが私に問い掛けた。

「そうですね、基本的にお正月の三が日以外、お店の定休日は設けてないんですよ。いつバースデーケーキの予約が入るかわからないからって理由なんですけど、その代わり、私たち従業員は曜日で固定休が決まっています。私は火曜日と土曜日をお休みにしてもらっているんです」

「え、じゃあ今日は……」

「はい、今日は有給休暇を使わせてもらいました」

休日は、家族連れの来店客が多い。

ショーケースの中に置かれるケーキを、どれにしようと覗き込むお客さんの姿を見ると、幸せな

気持ちになれる。

洋菓子店に来店するお客さんは、大抵みんなが幸せな表情をしている。

そんな表情を見ていると、私も幸せのお裾分けをもらっている気持ちになれるのだ。

だからクリスマスやバレンタインなど、イベントがあると忙しくなるけれど、私はこの職場が大好きだ。

「じゃあ、今度来る時は、梢子さんの休みに合わせなきゃだな」

話しながら歩いていると、いつの間にか道後商店街のアーケードを出て、市内電車の道後温泉駅前まで来ていた。

ホームには、タイミングよく大街道^{おおかいどう}経由、JR松山駅行きの市内電車が停まっている。

一緒に乗車するも、私は途中の上一万^{かみいちまん}駅で乗り換えになる。

「私は逆方向なので、ここで失礼しますね」

私はそう言うと、藤川さんに会釈して電車から降りた。

藤川さんは、私の背中にこう声を掛けた。

「俺、必ずここに戻って来ますから、その時にまた会いましょう」

運転士のアナウンスに続いて音声流れ、扉が閉まる。私は電車が動き始めるまでその場に留まり、見送ることにした。

藤川さんも、窓から私を見ている。

電車が見えなくなるまで、私はその場から動けないでいた。

第二章 再会

藤川さんを見送ると、私は本町方面ほんまちへ向かう電車の到着を待つて、それに乗った。

自宅の最寄り駅に到着すると、私は大荷物を抱えて電車を降り、帰路につく。

家に到着すると、バッグの中から鍵を取り出した。

これ、本当に見つかってよかった……

父は今日、夜勤で不在のため、鍵をなくしていたら家の中に入れないところだった。

玄関の扉を開けるとドアガード以外の施錠をして、スツケースを持ち上げる。

自分の部屋へ戻る前に、リビングでスツケースを開け、洗濯物を取り出し洗濯機に投入した。

その流れでシャワーを浴び、化粧も落としてスッキリすると、風呂上がりのスキンケアを済ませてドライヤーを手に再びリビングへ向かう。

ソファアに座り、テレビをつけて、番組を流し見しながら髪の毛を乾かしていると、私のスマホの待ち受け画面がメッセージを受信したのか明るくなった。

それを見て、そういえば藤川さんと連絡先を交換しなかったことを思い出す。

『また会いましょう』と言った割に、連絡先を交換しましょうとは言われなかったな。あれはやっぱり社交辞令だったんだろうな、うん。

あの人は東京の大手企業にお勤めの、パイロットという特別な仕事をしているサラリーマンだ。人付き合いが上手だから、リップサービスも上手なだけなんだ。きつとそうだ。

元々顔立ちの整ったイケメンだけど、特殊な職業のせいで、そのイケメンフィルターが過剰に掛かって見えたただけだ。本気で言葉の通りの意味合いだと思わないほうがいい。

自分にそう言い聞かせながらも、その反面で彼の魅力を素直に認めている自分もいる。

顔立ちはもちろんのこと、立ち姿もサマになっていたし、さり気ない気配りができる、本当に素敵な人だったな……

母の店を出てから、ほんのひと時一緒に過ごしたことを思い出しながら、ドライヤーのスイッチを切り、コンセントを抜く。

髪の毛の水滴で濡れないよう、首周りに掛けていたタオルとともに洗面所へ持って行くと、タオルを洗濯機の中へ、ドライヤーを元の位置に戻して再びリビングへ向かった。

明日、職場へ持つて行くお土産のお菓子と、内子町うちこに住む姉一家用のお菓子、姪の桜子のシール帳を、一か所にまとめて、自分のわかる場所へ置く。

自宅用のお土産は、包装を外して箱を開け、ダイニングテーブルの上に置く。

これでミッション完了だ。

私は荷物を持って、自分の部屋へ移動した。

今日は本当にいろいろなことが起こった……

部屋に戻り、荷物を片付けてベッドの上に横たわり目を閉じていると、いつの間にか次の日の朝

を迎えていた。

これからいつも通りの日常が始まる。

あれは非日常体験だ。気持ちを切り替えようと、私は勢いよく身体を起こすと、出勤の支度を始めた。

職場でオーナーに有給休暇のお礼を伝え、休憩室にお土産のお菓子を置いておくと、休憩時間にみんなから結婚式どうだった？ 上京ついでにどこか観光した？ などと質問攻めにあった。

金曜日の仕事終わりに上京し、土曜日が結婚式、日曜日の帰宅だからそこまでスケジュールに余裕はなく、慣れない土地での移動にアタフタしていてそれどころではなかった。

結婚式が行われる土曜日の早朝にホテル周辺を散策し、翌朝は横浜駅周辺を満喫したくらいだ。都内もいろいろ行きたかったけれど、今回は時間が足りなくて、横浜のみの観光となった。いつになるかわからないけれど、都内観光は次回のお楽しみに取っておこう。

そう伝えると、みんなも頷いてくれる。

「そうよ、都会はいつ行っても楽しいもん。刺激が強すぎて、こっち帰ってきたら何もないやん！ って思うんよね」

その言葉に私も激しく同意した。

都会は交通インフラも整っているし、物も情報も溢れている。それだけに、松山に戻ってくるとホッとする反面、何もない田舎だと痛感する。

休憩時間も終わり、午後からまたいつものように働き、一日が終わる。

翌日は公休日なので、私は姉にお土産を渡そうと、車で内子町へと向かった。

今は高速道路も通っているけれど、そこまで急ぐ必要はない。一時間弱のドライブを楽しもうと、車を南予方面へ走らせた。

姪の桜子は現在四歳。来年、町内にある幼稚園へ通うことになっており、今はまだ姉が家で面倒を見ている。なので平日の午前中に姉の家へ遊びに行くと、もれなく桜子の子守りがついてくる。

先週、帰宅後に桜子がシール帳がないことに気付き、私のバッグの中に入っていたことを知った後もしばらくの間は泣いて大変だったと姉から聞かされ、私もこれからは帰る前に自分のバッグの中身を再度確認しなければと思った次第だ。

無事にお土産とシール帳を渡し、桜子と一緒に遊ぶ。そのまま昼食と一緒に食べている時に、母から内子の産直販売所で野菜を買ってきたと連絡が入っていたことに気付く。私は姉の家を後にすると、母のお使いを済ませ、帰路についた。

母の出勤前に野菜を渡し、任務完了だ。

そして翌日また仕事に向かう。

そんな平穏な日々が続くものだと思っていた。

* * *

それから一カ月ほど過ぎたある日のこと。

金曜日の夕方、この日は珍しく、早い時間にショーカーケースの中にあるケーキなどの生菓子が完売した。日持ちする焼き菓子も、今日は飛ぶように売れて在庫が少なくなっており、いつもより一時間ほど早く閉店することになった。

店の営業時間は午前十時から十九時だけど、オーナーがこの日は十八時に閉店を決定し、私は一時間早帰りさせてもらえることになった。

スタップルームで着替えを済ませ、ロッカーから荷物を取り出そうとした時、スマホの待ち受け画面にいくつものメッセージの通知が溜まっていることに気付いた。

メッセージのアイコンは母の店の常連客、武田さんのものだ。

バイトをしていた時に連絡先を交換したけれど、バイトのシフト関連での業務連絡以来、ずっと連絡なんて取ったことがない。

いったい何ごとだろう。

急いで画面のロックを解除して、通話アプリのメッセージ欄を開くと……

『梢子ちゃん、大変！ あのイケメンが美樹ちゃんの店に来た！』

『はよ店においで！』

私は文面を見て、しばらくの間固まっていた。

あのイケメンって……。もしかして、藤川さん……？

たしかにあの時、店でもみんなに『また来ます』って言っていたし、私にも同じことを言って

いた。

まさか、本当に……？

藤川さんが甘いものが好きだと言っていたことを思い出した私は、彼への手土産に、店に残っている焼き菓子を箱に詰めた。ちょうどそこにオーナーが、個包装を終えたばかりのマカロンやフィナンシェなどを裏から持って来たので、事情を話すと「それなら出来立てのほうがいいだろう」と、それらを従業員価格で販売してくれた。

私はそれを、いつもより丁寧にラッピングする。支払いを済ませ店を後にすると、私は急いで自転車に乗った。

『シェ・フルール』の近くには大きな病院があり、お見舞い品や退院時の贈答品として焼き菓子が重宝されている。

職場が自宅からも近いため、私は一度帰宅して自転車を停めると、徒歩で電車乗り場へ向かい、道後行きの電車に乗った。

ライブイベントなどが行われる大きなホール、道後公園前を通過して、次はいよいよ道後温泉駅だ。

終点の道後温泉駅に到着すると、夕方でも駅前はまだ観光客で賑わっている。

私は人混みを避けるように店側の隅を歩き、脇道に入る。

そして母の店の引き戸を開けると――

「梢子さん、こんばんは」

そこにはカウンター席に座る藤川さんの姿があった。その隣に武田さん、その奥に山中さんが座っている。

「こ、こんばんは……」

まさか本当に、松山へ来るなんて……

驚いて入口で立ち尽くす私に、山中さんが笑いながら手招きする。

「梢子ちゃん、驚いたやろ！ この人、本当に来よったわ」

山中さんは、すでにお酒を飲んでいるようで、陽気になっている。

武田さんが私を手招きすると、藤川さんの隣に座るよう促した。

私は言われるがまま藤川さんに断りを入れて隣に座ると、そのタイミングで母が奥から顔を出した。

「あれ、今日は仕事終わるの早いんやね？」

母の声に、武田さんも同意の声を上げる。

「ああ、言われてみればそうやね。お店、十九時までじゃなかったん？」

武田さんの声に、私は頷いて返事した。

「今日は珍しく生菓子が早くに売り切れたんよ。焼き菓子もストックが少なくなったけん、一時間早上がりになったんよ」

今が十九時前だ。もし通常営業のままだったら、私がここに到着するのは一時間後だったかもしれない。

「梢子、裏、手伝って」

仕事上がりの娘に、母の容赦ない声が掛かる。

「えー？ 私もお腹空いとるんやけど」

不満の声を上げる私に、藤川さんが自分の皿を勧めてくる。

「これ、まだ箸つけてないんで、よかったらどうぞ」

「いやいや、これは藤川さんの分でしょう？ お客さまの食べ物に箸をつけるなんてとんでもない」

私はそう言って席を立つと、カウンターの中に入った。

「で、私は何したらいいん？」

母にエプロンを借り、奥のキッチンに入ると豚カツだろうか、揚げ物の準備が整っている。どうやらこれを揚げたらいいようだ。

私はコンロに火をつける。

油が適温になるまで少し時間がかかりそうなので、冷蔵庫を開けて、すぐに食べられるものがないかチェックした。

目についたのは、ポテトサラダと刺身、下味のついた唐揚げ用の鶏肉だ。

「ねえ、お母さん、揚げ物ついでに唐揚げも揚げていい？」

「かまんよ」

母の許可が出たので、私は自分の分の唐揚げも揚げることにした。